

「マルタとマリア」

ルカの福音書 10:38~42

はじめに

前回の箇所の内容はイエシュアの「良いサマリア人」のたとえから神を、そして隣人を「愛する」という律法についての教えを説きました。それを意味するヘブル語のアーハヴとは、一般的な概念とは大きく違い、神が見ておられるものを神と同じように見る、神とともに目指す、求めることであると述べました。そしてその神が見ておられるものとはすなわち、イスラエルの都エルサレムに関する、終わりの日についての神のご計画であると述べ、そのご計画を成し遂げられるために地上再臨されるイエシュアについての奥義としてこれを解き明かしました。そしてこの「愛する」こと、すなわち神を愛し、また隣人を愛することは律法の中で最も重要なこととしてこう言われています。

マタイの福音書【新改訳 2017】

22:37 イエスは彼に言われた。『あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。』

22:38 これが、重要な第一の戒めです。

22:39 『あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい』という第二の戒めも、それと同じように重要です。

22:40 この二つの戒めに律法と預言者の全体がかかっているのです。』

このように前回取り扱った内容は、律法の中で最も重要な奥義だったわけです。つまりイエシュアの地上再臨は、イスラエルの律法に秘められた最重要極秘事項であり、イスラエルを救い、「神の国」としてこれを再興する神の第一のご計画であり、「律法と預言者の全体がかかっている」ただ一つのご計画なのです。

これに引き続く今日の箇所もまた最も必要な一つのことについて示された出来事が記されています。ここではたとえではなく「マルタとマリア」という実在した姉妹が登場していますが、これらもやはり神のご計画を表す一つの「型」を表しているのです。それでは順を追って見てまいりましょう。

1. マルタ

ルカの福音書【新改訳 2017】

10:38 さて、一行が進んで行くうちに、イエスはある村に入られた。すると、マルタという女の人がイエスを家に迎え入れた。

10:39 彼女にはマリアという姉妹がいたが、主の足もとに座って、主のことばに聞き入っていた。

10:40 ところが、マルタはいろいろなもてなしのために心が落ち着かず、みもとに来て言った。「主よ。私の姉妹が私だけにもてなしをさせているのを、何ともお思いにならないのですか。私の手伝いをするよ

うに、おっしゃってください。」

10:41 主は答えられた。「マルタ、マルタ、あなたはいろいろなことを思い煩って、心を乱しています。」

まず「マルタ」という女性がイエシュアを家に迎え入れたとあります。彼女には「マリア」という姉妹もいましたが、イエシュアを迎え入れたのはこの「マルタ(מַרְתָּא)」でした。旧約聖書に同じ名前は存在しませんがこの名前には「苦々しい、苦しい」という、本来は受けるべき神の祝福を奪われた非常な激しい苦しみ(創 27:34)を意味するマル(מַר)、あるいは「逆らう」という、本来は神とそのしもべらに逆らう(民 20:10)という意味のマーラー(מָרָה)という言葉が込められています。イエシュアをもてなすため、仕えるために家に迎え入れたマルタでしたが、ここからの彼女の様子はまさにこれらの言葉のようになっていきます。マルタは「いろいろなもてなしのために心が落ち着かず」「いろいろなことを思い煩って、心を乱し」まさにマル、苦しんでいる様子がうかがえます。またさらに姉妹のマリアが自分にだけ「私だけにもてなしをさせている」ことにもマル、苦々しさを募らせています。そしてその苦々しさのはけ口を姉妹のマリアにではなく「何ともお思いにならないのですか。私の手伝いをするように、おっしゃってください」と、なんと自分が迎え入れたもてなすべき方であるはずのイエシュアにぶつけています。これは本来あってはならない行為であり、まさにマーラー、道理に逆らう、イエシュアに逆らう行為です。マルタのこの様子、言動は一体何を表しているのでしょうか。それはイスラエルの民です。神の選びの民であるアブラハムの子孫たちの歩み、行ってきた事実のその「型」がここでのマルタの姿には表されているのです。彼らは神の民として選ばれていながら、その行いは常に神に逆らうものばかりでした。こう記されているとおりです。

申命記【新改訳 2017】

9:6 知りなさい。あなたの神、【主】は、あなたの正しさゆえに、この良い地をあなたに与えて所有させてくださるのではない。事実、あなたはうなじを固くする民なのだ。

9:7 あなたは荒野であなただの神、【主】をどれほど怒らせたかを忘れずに覚えていなさい。エジプトの地を出た日からこの場所に来るまで、あなたがたは【主】に逆らい続けてきた。

そしてユダヤ人とも呼ばれる彼らは、神のしもべである多くの預言者たちを苦々しい存在として受け入れず、これらを殺し、ついには神の御子であられるイエシュアまでも拒絶し、これに逆らい、十字架で殺されるように仕向けたのです。そのようなユダヤ人たちの行いがこのマルタには「型」として表されているのです。

しかし、それだけではありません。このマルタの姿にはもう一つ、重要な事実が表されています。それは終わりの日における、イスラエルの残りの者と呼ばれるユダヤ人たちの姿です。その日に現れる不法の子、獣と呼ばれる反キリストによって、彼らはこれ以上ないほどの大きな苦しみを味わい、大きな患難を通ることになるからです。しかし神はそんな彼らを決してお見捨てにならず、彼らの名を呼び、これを集め、その苦しみから救い出されるのです。その事実が心を乱しているマルタに対し「マルタ、マルタ」と二度呼びかけておられる様子に表されているのです。つまり一度目の呼びかけは初臨のイエ

シユアであり、そして二度目のものはもちろん再臨のイエシュアが御民イスラエルをお集めになる御声を表しているのです。マルタに対してイエシュアは決して怒っておられるのでも嘆いておられるのでもなく、ただ苦しんでいる彼女の名を呼んで、これをみもとに引き寄せておられるように、再臨のイエシュアはイスラエルの残りの者を集められ、これを救い出されます。この重要な神のご計画がここでのイエシュアとマルタについての出来事には表されているのです。

2. マリア

ルカの福音書【新改訳 2017】

10:42 しかし、必要なことは一つだけです。マリアはその良いほうを選びました。それが彼女から取り上げられることはありません。」

では次にマルタの姉妹、マリア(מִרְיָם)についても見てみましょう。この名前は同じ人物が旧約聖書に存在します。モーセとアロンの姉、ミリアムです。

出エジプト【新改訳 2017】

15:19 ファラオの馬が戦車や騎兵とともに海の中に入ったとき、【主】は海の水を彼らの上に戻された。しかし、イスラエルの子らは海の真ん中で乾いた地面を歩いて行った。

15:20 そのとき、アロンの姉、女預言者ミリアムがタンバリンを手にとると、女たちもみなタンバリンを持ち、踊りながら彼女について出て来た。

これはマリアすなわち「ミリアム」が聖書で最初に登場した場面です。彼女はイスラエルが絶体絶命の大ピンチを潜り抜ける時、「女たち」を率いてその時「出て来た」とあります。実際の状況としてはミリアムも女たちもイスラエルの子らとして海の中を歩いたのですが、ここではまるでイスラエルとは別の動きをする存在のように記されています。この記述は預言であり、神のご計画を表す「型」です。それはすなわち、終わりの日にイスラエルが大きな危機、大きな患難を通る時、そこから出て来る、分かれ出て行く存在がいることを表しており、それはもちろん私たち教会です。世の終わりの大患難、その時私たち教会はまさにそこから分かれ出て行き、これを通ることがありません。ちなみにミリアムは「タンバリン」を手にしていたとありますが、この楽器が聖書で最初に使われた箇所を見てください。

創世記【新改訳 2017】

31:25 ラバンはヤコブに追いついた。そのとき、ヤコブは山地に天幕を張っていたが、ラバンもギルアドの山地に身内の者たちと天幕を張った。

31:27 なぜ、あなたは逃げ隠れて私を欺き、私に知らせなかったのか。タンバリンや豎琴で喜び歌って、あなたを送り出しただろうに。

これはラバンがヤコブすなわちイスラエルに対して言った言葉です。実際にはそうはなりませんでしたが、ラバンはイスラエルを「タンバリンや豎琴で喜び歌って、あなたを送り出した」と言っています。

このようにタンバリンとは本来、イスラエルと和解し、その友好を保ちつつも、彼らを送り出す、つまり別れる、離れることを意味する楽器なのです。そのような意味を持った楽器を手にし、女たちを引き連れてイスラエルから出て来た存在、それがミリアム、すなわちマリアという名が指し示す私たち教会の姿です。

では教会は終わりの日、神のご計画においてどのように扱われるのでしょうか。それがマリアが選んだ「必要なことは一つだけです。マリアはその良いほうを選びました」という事実に表されています。彼女がしたことを振り返ってみてください。マリアは「主の足もとに座って、主のことばに聞き入っていた」とあります。彼女はイエシュアの「足もとに座って」いました。この一見何の変哲もない描写の中に神のご計画の奥義があるのです。ヘブル語で「足」のことをレゲル(לָגַל)といい、その最初の言及は創世記 8:9 です。

創世記【新改訳 2017】

8:8 またノアは、水が地の面から引いたかどうかを見ようと、鳩を彼のもとから放った。

8:9 鳩は、その足を休める場所を見つけられなかったので、箱舟の彼のもとに帰って来た。水が全地の面にあったからである。彼は手を伸ばして鳩を捕らえ、自分がいる箱舟に入れた。

8:10 それからさらに七日待って、再び鳩を箱舟から放った。

8:11 鳩は夕方になって、彼のもとに帰って来た。すると見よ、取ったばかりのオリーブの若葉がそのくちばしにあるではないか。

これはノアの箱舟の物語の一節です。ノアは鳩を三度放ちますが、一度目は「足を休める場所を見つけられなかったので、箱舟の彼のもとに帰って来た」とあり、ここに聖書で最初のレゲルが使われています。実はこのノアが放った鳩とは、父なる神が遣わされた御子イエシュアのたとえ「型」となっているのです。この一度目の鳩についての記述はイエシュアの初臨の「型」であり、ご自分の足台、王座もなく、むしろ拒絶され、殺され、しかし三日目によみがえり、天に昇り、御父のもとに帰られたイエシュアを表しているのです。つまり今、イエシュアのレゲル「足」はこの地上にはなく、天にあるということになります。ですから「主の足もとに座って」いたマリアの姿には、私たち教会がこの地上から天に移され、そこに住まうようになることが表されているのです。この事実はノアが二度目に放った鳩が「オリーブの若葉」をくわえて再びノアのもとに帰ったという事実にも表されています。つまりこの「オリーブの若葉」もまた私たち教会を表しているのです。

そしてマリアは「座って」いたと訳されるヘブル語ヤーシャヴ(יָשָׁב)にもぜひ注目していただきたいです。この言葉は本来、「住む」という意味で用いられ、最初の言及は創世記 4:16 になります。

創世記【新改訳 2017】

4:14 あなたが、今日、私を大地の面から追い出されたので、私はあなたの御顔を避けて隠れ、地上をさまよい歩くさすらい人となります。私を見つけた人は、だれでも私を殺すでしょう。」

4:15 【主】は彼に言われた。「それゆえ、わたしは言う。だれであれ、カインを殺す者は七倍の復讐を受ける。」【主】は、彼を見つけた人が、だれも彼を打ち殺すことのないように、カインに一つのしるしをつけられた。

4:16 カインは【主】の前から出て行って、エデンの東、ノデの地に住んだ。

これは神がアダムの子カインと語られたものですが、罪を告白した彼を神は「大地の面から追い出され」また「だれも彼を打ち殺すことのないように」し、そして彼は「ノデの地に住んだ」という出来事に聖書で最初のヤーシャヴが使われています。カインが「住んだ」「ノデ」という地名も「逃げる」という意味のナーダド(נָדָד)からついた固有名詞で、実際に彼はウロウロと地をさまよったのではなく、殺されることがない安全な場所にかくまわれ、そこに「住んだ」住むようにされたです。このようにヤーシャヴとは本来、地上を離れ、安全な場所に逃がされ、かくまわれてそこに住む、住まわされるという意味があるのです。終わりの日に現れ、世界を支配する獣、反キリストは自分を神とし、従わない者はすべて殺すため、イスラエルだけでなく私たち教会にとってもこの存在は脅威となります。しかしイエシュアは私たち教会を「だれも…打ち殺すことのないように」逃がし「大地の面から」天上へと移してください、そこにヤーシャヴ、住む者としてくださるのです。このような約束、神のご計画が「主の足もとに座って」いたというマリアの姿には表されているのです。

そしてマリアはただ主の足もとに座っていたのではなく、イエシュアの「主のことばに聞き入っていた」ともあります。「聞く」という意味のシャーマ(שָׁמַע)は本来、主の歩く音すなわち主の足音を「聞く」(創世記 3:8)という意味の言葉です。主の足音を聞き、それを聞き続けるためにはどうすれば良いでしょう。それは主が行かれるところについて行く、主とともに歩くしかありません。いったんは天に上げられ、そこに住まう私たちですが、イエシュアはいつまでも天にとどまってはおられません。大患難の苦しみの中でその御名を呼ぶ御民イスラエルを救うために地上再臨されるのですから、私たち教会も主につき従って行くことになるのです。そのような事実までもがこの「主の足もとに座って、主のことばに聞き入っていた」というマリアの姿には表されているのです。

3. 一つだけです

イエシュアはマリアの姿に秘められたこれらの奥義を指して「必要なことは一つだけです。マリアはその良いほうを選びました。それが彼女から取り上げられることはありません。」と言われたのです。これを解き明かす一つの預言の御言葉に今日も目を留めましょう。

I テサロニケ人への手紙【新改訳 2017】

4:16 すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、

4:17 それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることになります。

4:18 ですから、これらのことばをもって互いに励まし合いなさい。

これを記した、いや預言したパウロは「これらのことばをもって互いに励まし合いなさい」と言いました。聖書には私たちの慰めや励ましとなりうる多くの御言葉が記されていますが、教会において誰かを励ます時、慰める時にはこの御言葉を使いなさいと明確に指示、命令されているものは、実は上記のこの預言、ただ一箇所のみなのです。ちなみに祈る時にはこう祈りなさいと命じられているものも「主の祈り」と呼ばれる祈りのみですね（今回はこの祈りについての解き明かしです）。つまり上記のこの預言は、私たち教会を励まし、慰めるただ一つの、まさに「必要な一つだけ」の御言葉なのです。たとえどれだけたくさんの聖句を暗唱できても、どれだけ多くの時間を聖書を読み、これを調べ、学ぶことに費やしたとしても、携拳とも呼ばれる上記の預言に結びつかず、これを覚え、これを忘れ、求めることがないならば、私たち教会もいろいろな御言葉、いろいろな聖書解釈、たくさんの説教に心を乱され、思い煩わされ、まさに教えの風に吹き回され、その結果、御心でない祈りを主に求め続け、そして人をさばき、自分をもさばくようになり、マリアであるにもかかわらずマルタのように苦しむことになるのです。いいですか、もう一度言います。「必要なことは一つだけです。」それはすなわちイエシュアの足もとに座り、御言葉に聞き入ったマリアの姿に表された、携拳とも呼ばれる今日述べた教会に対する神のご計画のみです。他にはありません。「必要なことは一つだけです。」これは私の考え、私の主義主張ではなく聖書のそれであり、神のご計画を成し遂げられるただ一人の御子イエシュアの御言葉です。どうかこの一事を忘れないでください。人は二つの目を持ってはいても同時に二つのものに目をとめることはできません。二つの耳があっても同時に二人の話に聞き入ることはできません。そんなことをしようとするならば、二つとも失ってしまいます。まさに二兎を追う者は一兎をも得ず、なのです。神が私たち教会に、あなたに与えようとしておられるものはたくさんの能力でも知識でもありません。イエシュアといつまでも「いつまでも主とともにいることになります」という以下の約束ただ一つです。

I テサロニケ人への手紙【新改訳 2017】

4:16 すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、

4:17 それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることになります。

4:18 ですから、これらのことばをもって互いに励まし合いなさい。

ただ一つのこの御言葉をもって互いに励まし合い続けましょう。この成就、実現の時は決してはるか未来ではありません。それは明日、いやこの後すぐかもしれないのです。もし今あなたの心臓が停止するなどして肉体の機能が停止するならば、この預言にある「キリストにある死者」となり後はその「よみがえり」の時まで眠ることになります。人は眠っている間、どれだけ時間が経とうとその長さを認識しません。つまり、今もし死ぬならば、あなたにとってはこれらの御言葉は、今日成就すると感じられるのです。神が私たちにお与えになるこの約束の日が、もうすぐそこまで近づいているかもしれないのに、なぜ他のことを思うのですか？なぜこの一つだけに目をとめないのですか？「必要なことは一つだけです。」これ以外のものは何も必要ありません。インマヌエル、神がともにおられる「こうして私たちは、いつまでも主とともにいることになります。」それで十分ではありませんか。